

聖書日課 『からし種』 2024.10.6－10.13

| | |
|---------------------------------------|---|
| <p>10月6日 (日)</p> <p>哀歌 3章</p> | <p>「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる」(22－23節)。今、世界中を覆う悲しみや暗闇を考える時、暗澹たる想いが心に広がるのを禁じ得ない。しかし、その私たちの心の真ん中に向かって「主の慈しみと憐れみは、決して絶えることも尽きることもなく、朝ごとに新たに届けられる！」と聖書は宣言する。ハレルヤ！</p> |
| <p>7日 (月)</p> <p>哀歌 4章</p> | <p>「主の憤りは極まり／主は燃える怒りを注がれた」(11節)。「ここは聖地。主なる神が共にいてくださるのだ」と人びとが誇りにしてきたエルサレムが灰燼と帰してしまった。主の憤りと怒りの激しさに打ちのめされて、人びとは哀歌を歌った。しかしそれらの日々を、主なる神が彼らのすべての罪を負い共に歩んでくださったことを、彼らは後の日に知ることになる。</p> |
| <p>8日 (火)</p> <p>哀歌 5章</p> | <p>「父祖は罪を犯したが、今は亡く／その咎(とが)をわたしたちが負わされている」(7節)。自分たちに降り注ぐ厳しい「主の燃える怒り」を、人びとは「父祖の罪」と表現したけれども、バビロンに捕え移される歴史を通して、人びとは「私たち自身の罪」と告白する者に変えられていく。主は私たちが自らの罪に気づく日を、今日も深い忍耐をもって祈り続けておられる。</p> |
| <p>9日 (水)</p> <p>エゼキエル 1章</p> | <p>「カルデアの地ケバル川の河畔で、主の言葉が祭司ブジの子エゼキエルに臨み、また、主の御手が彼の上に臨んだ」(3節)。「約束の地」から引きはがされ深い失意の中でバビロン(カルデア)に捕囚された人びとは、自分たちの思いをはるかに超えた主の慈しみと出会うことになる。彼らが嘆きの歌を歌ったケバル川のほとりが主と出会う場所に変えられていく。</p> |

聖書日課 『からし種』 2024.10.6-10.13

| | |
|--|---|
| <p>10日 (木)</p> <p>エゼキエル 2章</p> | <p>「彼はわたしに言われた。『人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。』彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた」(1-2節)。 主の栄光を目のあたりにして地に倒れたエゼキエルは霊の力によって立ち上がらされていく。新しい一日の初めに、主の息吹を受けて、自分の足で立ち上がる力をいただいでいこう。</p> |
| <p>11日 (金)</p> <p>エゼキエル 3章</p> | <p>「彼はわたしに言われた。『人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい」(1節)。幻の中でエゼキエルが「食べよ」と言われた巻物は「蜜のように甘かった」(3節)。蜜は、疲れきった心と体に新しい力を注いでくれる主の愛である。わたしたちは主の愛を受けずして、この世界を生きていくことはできない。</p> |
| <p>12日 (土)</p> <p>エゼキエル 4章</p> | <p>「人の子よ、れんがを一つ取って目の前に置き、その上に都であるエルサレムを刻みなさい」(1節)、「左脇を下にして横たわり、イスラエルの家の罪を負いなさい」(4節)。エゼキエルが祭司として仕えたエルサレム神殿はずでに崩れ去っていた。その滅びを「自らの罪」とすることから預言者の仕事は始まっていく。さて「わたし」は何から始めていくのか？</p> |
| <p>13日 (日)</p> <p>エゼキエル 5章</p> | <p>「それゆえ、主なる神はこう言われる。『お前たちが周りの国々よりもいっそうかたくなで、わたしの掟に従って歩まず、わたしの裁きを行わず、…主なる神はこう言われる。わたしもお前に立ち向かい、国々の目の前でお前の中で裁きを行う』」(7, 8節)。主に従わなかったイスラエルの民への主の憤りの大きさに、主がこの民を愛された愛の深さを知らされる。</p> |